



つながれ KENPOKU

令和8年10月19日 発行

若者の発想と情熱が地域を動かす！

～「よしいだ Young プランナーズ」の挑戦と地域協働のヒント～【吉井田学習センター】

1. 立ち上げの背景と想い：持続可能な地域循環へ

「公民館を利用するのは高齢者が中心で若者の姿が見えない…」これは多くの社会教育施設が抱える共通の課題です。吉井田学習センターでは「若者は地域に関心が薄い」と諦めるのではなく、「企画や運営に関わるというアプローチを提示してこなかったからではないか」という仮説を立てました。

従来の「大人が決めた講座に参加してもらう」受動的なスタイルから脱却し、企画段階からすべてを若者に委ねる主体的な取組へ舵を切りました。子ども時代にイベントを楽しみ、学生時代に企画者として関わる体験を積むことで、将来社会人になっても地域に目を向ける「持続可能な社会教育のエコシステム」の構築を目指したのです。



2. 巻き込みのアプローチ：「当たって砕けろ」の行動力

「待っているだけでは来ない」と考えた鳴原浩之館長は、自ら大学サークル一覧を調査し電話攻勢、近隣の高校・中学校へは直接足を運びました。「当たって砕けろ」の精神でアプローチを重ねた結果、福島学院大学（AMUZ!）、福島大学（PALEA）、高校生・中学生が結集し、「よしいだ Young プランナーズ（通称：ヤンプラ）」（33名）が発足しました。

また、現場職員の負担感を考慮し、**まずは「館長自らの単独チャレンジ事業」としてスタート**させることで、現場の機動力を確保した点も大きなポイントです。



3. アイデアを引き出す「任せ方」と「伴走」のルール

若者の自由な発想を承認するため、「付箋ブレスト」を実施。出された案は「難易度」と「動・静（アクティブ／静的）」の2軸で可視化し、客観的に実現可能性を検討しました。

💡 若者に「任せる」ための4つの安全条件と裏側のサポート

- ① 予算内でおさまること：
地区まちづくり懇談会の交付金を活用。必要経費の上限を明示。
- ② 安全性が確保できること：
ボランティア保険加入。お化け屋敷の足元ミニ LED 配置や触れないルール徹底。かき氷販売にあたって保健所へ営業届を提出。
- ③ 実施場所が確保できること：館内・敷地内の適切な活用。
- ④ 家庭では簡単に体験できないこと：「わざわざ来館する価値」と特別感の創出。

※ この4条件を満たせば大人は口出しせず、LINE グループで迅速に相談に乗り、学生のスピード感に寄り添って伴走しました。

4. 初イベント「みんな集まれ 納涼縁日！」の大盛況

令和8年8月30日、ヤンプラが企画・運営のすべてを担った初イベント「みんな集まれ 納涼縁日！」を開催。「100人程度来れば大成功」という予想を大きく裏切り、当日はなんと**のべ400名以上の地域住民や子どもたちが殺到！**用意した有料体験チケット（100円で5店利用可）の販売数は298枚に達しました。

当日は「Aチーム（屋台・体験）」と「Bチーム（お化け屋敷）」に分かれて運営。射的では「**得点ランキング掲示**」によりリピーターを生み出し、プールを午前（スーパーボール）と午後（ヨーヨー）で使い回すなど若者ならではの工夫が光りました。また、暗闇と音響にこだわった本格的なお化け屋敷（259名利用）も大行列となりました。



※ チケット代（100円）による余剰金は、次回の「冬休み事業」の活動原資として繰り越し還元される循環仕組みを構築しています。

5. 参加した若者たちのリアルな声（振り返りシートより）

■ 大学生・高校生（企画・運営担当）

「ゼロから企画・運営するプロセスのやりがいと難しさを実感しました。当日の回転効率など自分に足りない部分を痛感し、大きな学びになりました。心理学を学ぶ立場として、親子の愛情や信頼関係に目が向き、温かい発見がたくさんありました。」

■ 高校生・中学生（運営担当）

「大学生の先輩と一緒に本格的な会場作りができて最高に楽しかったです！」「自分が考えたアイデアで子どもたちが笑顔になってくれて、地域に貢献できた実感が湧きました。爽緑祭（文化祭）前の良い経験になりました。」

【館長インタビュー】一歩を踏み出す勇気と若者への信頼

「当たって砕けろ精神で、まずは若者を信じて委ねてみる」

教員時代、東日本大震災直後の秋に、自校の子どもたちのため高校生やアーティストを巻き込んでイベントを成功させた原体験が私の根底にあります。

「失敗したらどうしよう」と心配する前に、大人が枠組みを作って若者にチャンスを与えたら、彼らは期待以上の熱量と成果で応えてくれます。



吉井田学習センター
館長 嶋原 浩之 氏

6. 他館へ届ける「若者参画」成功の3大ポイント

- ① 待つのではなく「出向く」：大学サークルや学校へ直接出向き熱意を伝えるアプローチが道を開く。
- ② ロ出しせず「条件で見守る」：予算・安全等の4条件を提示した後は、若者の感性とスピードに任せる。
- ③ 最初は「スモールスタート」：全館事業にせず「館長単独事業」から始めることで現場負担を抑え動かす。



7. 今後の展望：持続可能なチャレンジと地域の居場所へ

夏休みの「納涼縁日」の成功をステップに、吉井田学習センターでは冬休みの「チャレンジよしいだ・冬」や、地域・学校がコラボする「ふれあい Xmas コンサート」など、年間を通じた若者参画のサイクルを稼働させています。単発のイベントで終わらず、若者がいつでも戻って来られる「地域の居場所」として進化を続けています。